〈小説〉選考委員特別賞

素泊りの客

相良　文雄

1

商売柄、心に深く刻まれる客はいる。この客もそうだった。

ただ、その年に限っていつもと違っていた。何が？と言えば、『夕食を食べる』と初めて言ったのだ。いったい何があったのか？女将（おかみ）の真理子は思わず客の目を見た。だが、その客はいつも通り、いや、いつもより少し穏やかな口調で語り始めた。

それまでは素泊り。つまり食事なしが〝決まり〟だった。

「素泊りできますか？」

落ち着いた声の電話で、そう問うて来たのは、二十年余り前だったと記憶している。土地柄、コンビナート等の関係で、この手の話は多い。それが工業地帯の一翼を担う市原で、旅館を営む者の宿命と言えば大袈裟だが、普通の感覚と言えば、そうも言える。

「大丈夫ですけど、何泊なさいます？」

「八月十五日。一泊」

極めて決然とした口調であった。そこに有無を言わせない意思の強さを感じ、真理子はたじろいだ。

「しょ……、承知いたしました。チェックインは三時からです」

いろんな客がいることは、この商売を継いでまだ五年の浅い経験ながらも、充分に承知している筈であった。

「お昼前からだと駄目ですか？」

念を押す感じがした。

「駄目と言うわけではございませんが、前日泊との関係で、部屋が片付いていない可能性がありますので……」

人手不足は常の事。それを言い訳にはしたくなかったが、パートの部屋係に、特別の事を頼むのに、些か躊躇（ためら）いがあった。

「では、前日からの分をお支払いするとしたら……？」

そこは譲れない、という意思が感じられた。

「分かりました。超過分と申しましてもなんですから、前日から空いている部屋をお使い頂くよう、手配しておきます。

それでよろしいでしょうか？」

「勿論。よろしく頼みます」

「こちらこそ……。お待ち申し上げております」

というようなやり取りから始まった。

「この町には、出張でよく来てたんだ。取引先があってね」

夏用に、氷を浮かした水出し茶と、五井は『新松月』の『くろしお最中』を出しながら、真理子は客の話を聞いていた。

『くろしお最中』は、戦後、砂糖が貴重品で、甘いものに不自由していたころ、客のたっての要望で作られたものと聞く。

だからかも知れないが、甘みが濃くはっきりした味が特徴だ。

それがお客には好評で、創業以来ずっと取り寄せている。

宿帳には、蜂須賀健一郎、東京都中野区南台二丁目……、と自

宅らしき住所と電話番号が書かれていた。
「今日は……。ご出張ではない？」
「今回は……、ね」
少しためらう表情を見せ、健一郎が言った。
「今回、ということは……？」
「今年の三月いっぱいで退職してね、初めての夏なの。例年だと夏休み中の筈だけど、これからは休みだらけ。とはいえ、いろいろ考えることもあってね……」
六十五歳で退職。今は関連会社の嘱託（しょくたく）として、週三日だけ働いているという。『お陰様で、人並みの生活は送れているよ』と。
「退職後のお仕事もちゃんとあって。
蜂須賀様は……、恵まれていらっしゃると思うのですけど、それでもいろいろ、お考えの事がおありなのですね」
「そりゃあるさ。だから、ここに泊まることに決めたんだよ」
「それは、それは……、大変失礼いたしました」
「いやいや……。現役の頃は、都内の勤め先から、直接取引先にね。日帰りばかりで、泊ったことなどなかった」
「東京から近い所為（せい）か、ゴルフや地方からのご出張、工場建設の関係が主で、その他のご用でのご利用はあまりございませんもの。
ところで、ぶしつけなお尋ねかもしれませんけれど、なぜ今年に限って、私どもの宿をご利用になりたいと……？」
真理子には不思議に思えた。退職して初めての旅行先として、真っ先に頭に浮かべるほどの魅力が、この町にはあるか？と言われればどうだろう。（卑下するわけではないけど）自信はない。
「それはね……、景色！」
窓を指さしながら、健一郎は、茶を一口ごくりと飲んだ。ただ、最中には興味がないのか、手を伸ばさなかった。
「けしき……、ここから見える風景という事でしょうか？」
予想外の一言に真理子は驚いた。これまでの宿泊客で景色を誉めた客など、誰一人いない。というより（ゴルフや業務での出張客はハナから）眼中にない、というのが正確な表現かもしれない。
「そう……。ここから見た雰囲気、大連に似てると思うんだよ」
健一郎は、真理子が想像もしていなかった言葉を発した。
「だいれん？だいれんと申しますと……？」
咄嗟（とっさ）に、何を言ってるんだろ？この人、と思った。
「中国の大連。以前ね、近くの会社に用があって、この前を通りかかったことがあったの。前に公園あるでしょ。そこから海を見てて、あれ！どこかで見た景色だけど、さてどこだったろうって。
ずっと考えてたわけ。そしたら、こないだ、学生時代の友人と飯食った折、大連に旅行した写真見せられて、『ああ』と思わず声を上げた。自分が小さい頃記憶していた、大連の港から見ていた景色と、前の公園から見た風景がシンクロしてたんだなって」
「つまり、市原と、ご記憶の大連の風景がよく似ていたと……」
「そう、実は小さい頃、一刻（いっとき）、（大連に）住んでいたことがあって。母がよく港に連れて行ってくれて、『あなたが生まれたのは

新京（現長春）だけど、本当の故郷は、あの海の向こうにあるのよ』って。そのとき見た景色を、朧気ながら覚えていたんだね」
「引揚者でいらっしゃる……？」
「うん。五歳くらいの子供の記憶は曖昧だと言われてるけど。印象深い、心に深く刻まれるような出来事や風景など、案外、しっかりした形で、記憶の底に畳み込まれているものだなと」
「そういうものかもしれませんね。昔、よく遊んでくれてた、祖母の手の温もりや匂いなど、今でもはっきり覚えていますもの」
父方の祖母は、自分の幼少時に亡くなったが、甘えて抱かれたり、一緒に遊んでくれた情景の、全部ではないけれど、幾つかは、鮮明に覚えている。その声や懐かしい匂いとともに。
「後で調べたことだけど、市原も大連も、産業の種類は違うけれども、工業都市だし、港湾都市でもある。市原の対岸には品川や川崎、大連の対岸には、天津（てんしん）とか山東省の街並みが臨める」
「そのことが、私どもの宿をお選びになった理由であると……、そういうことでしょうか？」
「その通り。さらに詳しいこと、必要があれば、おいおいお話しするとして……。早速、この部屋に籠りたい」
「こもる……？籠るということは、部屋からは一歩もお出にならない、ということでしょうか？」
「そう。幸い、部屋に風呂もトイレもあるみたいだから、明日の朝まで、ずっと籠りたいんだけど、いいかな？」
「そ、それは構いませんけど……」
真理子は、ぞわぞわとした嫌な予感がした。まさか……。
「前もって断っておくけど、部屋で首くくるとか、浴室で自殺するとか、絶対にないから。心配しないで。思うところがあって丸一日断食をする。それだけ。ご懸念には及ばない」
「断食……？でございますか。それはまた……」
意外な言葉に真理子は戸惑った。
「この大連に似た景色を見ながらだと、スムーズに（断食を）やれそうなんだよ。とはいえ、この時期、冷房は効いてるかもしれないけど、喉は乾く。水は飲みます。部屋の扉の外に、お手数だが、氷水のポットを、夕方でいいから、置いといてくれませんか」
「それはお安い御用ですけど、それだけでよろしいのですか？」
「結構。他は何も要らない」

2

蜂須賀健一郎は、それから毎年八月十五日の午前十時前後に現れては、一昼夜を部屋に籠ったまま過ごし、至極「さっぱり」とした表情で帰っていくのが習いとなった。
考えてみれば、不思議な客なのだが、長い間、それが続くとなれば、何とはなしに、当たり前の光景と化してゆく。
ただ、『心待ち』と言うほどではないものの、その日が近づいてくると、真理子は「今年も現れるかな」という期待と、一抹の不安がないまぜになり、落ち着かない気持ちにさせられる。
予約確認の電話があると、「ああ、また会える」と、安堵の胸を撫でおろし、実際に現れると、「やっぱり来てくれたか」と、

ほっと肩の荷を下ろすような感覚に襲われる。
この気持ちはどこから来るのだろう?少なくとも二人の間には、男と女の間に流れる特別な感情はない（と思う）。
恋に年齢は関係ない、とはいうものの、二十歳に及ぶ年齢差は、やはり意識のどこかには存在するものだろう。かと言って、父親に対する娘の気持ちというのも、当たっていないように思える。
『蜂須賀さんが見えるとき、真理子さん、まるで……、恋人でも迎えるように、そわそわしてるわよね』
仲居の松代が、からかい半分に言うほど、真理子は高揚する。
いったいこれは、どういう心の動きなのだろうか?
健一郎は、一晩籠ると、何か、憑き物でも落ちたような顔つきになり、朝の簡単な挨拶を済ませると、淡々と帰ってゆく。
すると、真理子自身も、何か大事な用件が終わったような、不思議な感覚で満たされ、なぜか?どっと疲れを覚える。
そこには、如何なる感情が潜んでいるのか?自分でもはっきりとは分からない。
宮崎出身の祖父が始めた旅館『日向荘』は、一室々々が独立したホテル形式の旅館である。そういう形式にしたのは、コンビナートが集中する、この地域特有の宿泊客のニーズに応えた部分もあるが、宿泊施設としての、様々な効率を優先した所為でもある。
その部屋の独立性、気密性を忖度(そんたく)して、健一郎がこの宿を選んだということは、充分に考えられる。
でも、なぜ一年に一度、しかも『終戦記念日』に断食を企図し、実行しているのか?という謎を解く鍵にはならない。
「お出でになるのは。いつも終戦記念日ですよね」と、それとなく持ち掛けると、「その丁度一年前が、僕の特別の日なのだよ」と。
ということは、一九四四年八月十五日に何かが起きたか、あったということだろう。それも、健一郎にとって、特別な何かが……。
「この景色を、日のある間は、ぼうっと眺め、日が落ちると対岸に輝く広大な光の群れを見る。そうすると気持ちよく腹が空いて、スーッと眠りに入れる。夜中に一度目が覚め、あなたが置いてくれた氷水でお腹を湿らせ、再びまどろむ。いつの間にか朝を迎え、腹にも頭にも、何もない状態になって、家に戻る。それが何とも言えず具合がいい。本当にここに来られてよかった」
一昼夜籠り、瞑想し、頭をクリアにした上で、過去の自分の身に起きた、数々の出来事を一つひとつ、記憶の中から取り出し、評価を加え、反省と確認をして、今一度、自分の、人間としての在り様を考え、同時に、今後の人生に生かすべく、自覚させるのだと。
第一線から退いた人間の余生とは、そういうものなのか、とは思うものの、今一つ、納得のいかない自分がいるのに気づいて、この疑念の根元には何があるのだろう?と。彼には、こちらの考えの及ばない、深い闇が潜んでいるような気がしてならない。

「『愛染かつら』って小説、ご存じないだろうな?」

『日向荘』を訪れ始めて、何回目の夏だったろう。そういう聞き方を健一郎がしたことがあった。

「『あいぜんかつら』ですか?いえ、存じません」

変わらず、水出し茶を淹れながら、真理子は答えた。

「戦前の話だけど、川口松太郎という大衆小説家がいて、その人が書いたベストセラー小説で、映画化もされたらしい。当時、人気絶頂だった上原謙と田中絹代の主演でね。その主題歌が『旅の夜風』という、詩人の西條八十が作詞した歌だけど……」

「ああ、西條八十なら、名前は聞いたことがあります」

「そう。で、小さい頃、その歌を、母が折に触れ口ずさんでいてね、その二番の歌詞にかかると、必ず……、涙をボロボロ流すんだよ」

「何か、特別の思い入れがおありだったのでしょうね」

「そうだね。この歌詞には、僕も少々堪えるところもあって……。正直言って、あまり歌って欲しくはなかったな」

「どんな歌詞だったのですか?」

「うーん。覚えたくない筈だけど、そう思えば思うほど心に染みついて離れないものらしく、逆にはっきり覚えちゃって……。《優しかの君ただ独り　発たせまつりし旅の空　可愛い子供は女の生命（いのち）　何故に淋しい子守歌》

確かに、当時の我家はこれに似た状況ではあったんだけど」

その時、健一郎が、一瞬、とても暗い表情になった。

「もしかして、お父様の身に何かおありになったとか……」

「うん。現地召集と言うやつ。母の話だと、華北戦線で戦死したと。知らせを貰ってから、母は益々『泣き女』になってしまった」

「そのお気持ち、よくわかる気がします。それと、もう一つ気になりましたのは、蜂須賀様のご兄弟の身に何か起きたのでは……、と」

「それ以上の話、今は勘弁してくれないか」

強く被せるような口調で、怖い顔になり、健一郎はそっぽを向いた。痛いところを突いてしまったようだ。

「お気に障りましたら、お許しください」

「いやいやとんでもない。人間、感情の動物だから、罪深い存在なのかもしれないね。ここに寄せて貰って、小さい頃の、満州での出来事の一つひとつが思い起こされ、回顧と反省を繰り返す。それでいつも、『仕方なかったな』と、自分を慰めて帰ることが出来る」

「そういう場所としても、お役に立てれば嬉しいです。これからもご贔屓（ひいき）にお願いいたします」

「こちらこそ、よろしく」

健一郎の取扱説明書ではないけれども、いつの間にか、常連客一人ひとりの扱い方に習熟し、会話でも、すっと引く技を身に付けている自分に驚くことがある。

生前、父真一は、真理子がこの宿を継ぐ事に反対していた。理由はいくつもあるだろう。まずは若気の至りもあって、父の

意に染まない結婚をしたこと。厳格すぎる父に反発し続けたことがもう一つ。更に、父の、仲居の松代に対する処遇と言うか、立ち位置を、いつまでも曖昧なまま、放置し続けたことへの怒りである。

様々なことが積み重なり、大喧嘩して、威勢よく家を出て行ったまではよかったが、夫の女性問題や、不誠実に伴う不和が引き金になり、およそ七年で離婚した。

合わす顔がないまま、出戻ったという不肖の娘。

その負い目もあり、父の意向もあって、宿の一従業員として、トイレや客室の掃除など、下働きからの再出発であった。

その後、過労気味だった父が、脳溢血で倒れたが、死ぬまで、娘が宿を継ぐ事に首肯しなかった。

そんな真理子の味方になったのが、長年、事実上、父のパートナーだった松代である。母亡きあと、彼女は献身的に父を支えた。

市原の地域性から、日本の産業、とりわけ石油化学工業の盛衰とは無関係ではいられない。ピンチは何度も訪れた。

その度に、経理に長じ、目端の利く松代に助けられた。出張の客に止まらず、全国の学校に働きかけ、工場見学の旅行生の宿泊を促進したり、ゴルフや養老渓谷など目当てのツアー客を募ったり。

そういう時の松代は、実に生き生きとしていた。

客を扱う職業が、生まれつき性分に合っているのだろう。それが真理子には羨ましくもあり、頼りがいのある所でもある。

母亡きあとの後添えとして、彼女ほど相応しい女性はいないと思った。父にそれを告げると、「世間知らずの小娘が、親に向かって、出過ぎた口を利くもんじゃない！」と即座に怒鳴られた。

「この宿は、真理子さん、あなたが守るべきです」

父が倒れ、闘病の後、二年で逝去。旅館の後継問題が起きた。

その折、「後を、松代さん、引き受けて頂けませんか」と切り出した真理子に、松代はきっぱりとそう言った。そして、「筋違いのお話しはお受け出来ません。お父様は、口ではああ仰っていても、本音は、一人娘のあなたに継いで欲しい、と思っていた筈です。物事の道理とはそういうものです」と強い口調で窘められた。

その言葉に背中を押され、四十歳の時、後を継いだ。

4

いつからか、蜂須賀健一郎は、気になる客の一人から、一人だけ気になる客に変わっていた。

健一郎も、自分の家庭の事を、問わず語りに、話すようになった。

あの時から、すでに六年が経過していた。

「嫁姑の問題はどこにでもあるのかもしれないけど、母は、絶対僕らの世話にはならない、と言うんだよ」

いつもの冷茶を口にしながら、健一郎は、苦々しい表情を浮か

べ、そう話し始めた。彼が、自分の家族の事情を、あれこれ話すようになったのは、自分に、心を許している証かもしれない。
「お母さま、お一人の方が……、気が楽なのかもしれませんね」
「だろうね。それに……、自分で言うのもなんだけど、そもそも母との確執は、物心ついてから始まり、結婚で決定打になったからね」
「あら、まあ、そうでしたの」
自分とおんなじだ。そう思うと、つい親近感を覚える。実直そうな健一郎にも、自分と似たような体験があったのだ。
「泣き虫の母が、小さい頃から嫌いでね。その原因に心当たりはあるけど、思い出す度に泣かれてもなあ、と。それもあって、結婚する相手は、芯の強い、滅多に泣かない女にしよう、と決めていた」
「それが今の奥様……？」
「うん。母は九州の田舎住まい。ただ卒寿もとっくに過ぎたし、一人で置いとくのは危ない、というので、こっちへ呼び寄せたい、と思ったんだけど、珠代、つまり妻に、例え少しの間でも、世話をかけるのは嫌だと言うんだよ」
健一郎は、途方に暮れた表情で、そう言った。
「嫁姑の問題とは別に、九州と東京では、そもそも生活のテンポも違うでしょうし、お知り合いとの関係もございましょうし……」
「その通りでね。見知らぬ東京で、施設に入るにしても、友達もなく暮らすのは、私に『死ね』と言っているのと同じだと。それでなくとも、あなたには裏切られているからね、と」
「裏切られている……？」
「母にはね、僕の花嫁候補として、地元にお気に入りの女性がいたわけ。それに僕は背いた。母は、自分の唯一つの願いも聞けないのかと、とても怒ってね。絶縁に近い状態が続いてた。そんな息子の言いなりになど、金輪際なってたまるかと……。気持ちは分かるけどね」
「親子って、本当に難しいものですね」
真理子は、父真一とのやり取りを思い出していた。同じ思いを、今、健一郎は身に染みて味わっているのだろう。

5

真理子が還暦を迎える年。健一郎が投宿を始めて十五年目の夏。いつもより少し柔らかな表情で、彼はやって来た。
「もう十五年か。節目と言えばそうかもしれないけど、この歳になって、漸(ようや)く心に背負った荷物が、軽くなる出来事があって……」
最中をパクリと食べ、冷茶を旨そうに啜った後、そう切り出した。
「それはようございました。それでは、今夜は思う存分……」
「そう。初めてお宅の料理を頂けるかな、と」
予約の電話でも『今年は夕食頂きますから、よろしく』と、これまであった軛(くびき)が取れたような、弾んだ声でそう言っていた。
「ミシン一つで洋裁をやりながら、元は馬小屋だった場所だけ

ど、父の恩給や遺族年金などで、そこを買い取り、家を建てて、母は洋裁の店を開いた。戦後の物不足や、女性のお洒落の風潮に乗り、結構流行ってね。僕もバイトしながらだけど、東京の大学に行けた」

「そうでございましたか」

「まあ、それが良かったのかどうか？肉親と雖（いえど）も、所詮人と人。人の情の綾というのか、行き違いと言うのか、それが僕の人生に微妙に影を落としていた」

「と言いますと、いつかお話になっていた……」

「そう。母との感情の行き違いによる齟齬（そご）が、僕の人生に大きな影響を与えていた。二年前に話したと思うけど、母は地元の施設で、白寿で亡くなったんだが、今頃、その書付が見つかったんだよ」

「書付？遺書みたいなものですか？」

「うん。僕は今年傘寿になる。そろそろ終活を始めようと思ってね。まず、母の遺品を整理して、母の家を解体して貰うことにしたわけ。そしたら、見落としがあってね。業者からの連絡で、押入れの天井裏から、母の書付が見つかった、と言うんだ」

「押入れの天井裏……。それはまた分かり難い場所ですこと」

「そう……。しかも小さな紙の箱でね。その中のノートに、僕にとって、これまでの人生を、ある意味覆すような事実が書かれていた」

「人生が……、覆る？」

「うん。母との齟齬がなければ、こちらに十五年も通おうとは、思わなかったかもしれない事実がね」

「それは、いつかお話になりかけた、ご兄弟のことでしょうか？」

「まさにそれ。初めて話すけど、僕には妹がいた。仲は良い方だったと思う。両親も凄く可愛がってた。僕が嫉妬するくらい。新京に居た頃が一番幸せだった」

健一郎が、静かに語り始めた。

《その生活が暗転したのが、父の招集と戦死さ。

殆ど唯一の働き手を失い、見る間に貧しい生活に陥った。

年中腹を空かせていて、その記憶はいまだに鮮明に残っている。

これは、見つかった母の書付に書いてあったことだけど、戦況の悪化もあり、父の死をきっかけに、母は帰国を決意した。だが、先立つものがない。母の洋裁技術も現地では殆ど役に立たず、帰国はおろか日々の生活もままならない。このままだと母子三人餓死しかねない。母は心を鬼にして、帰国費用捻出のため、僕か妹の何れかを、子供の欲しい現地の人に売ることにした。最初、母が選んだのは僕だった。しかし、選ばれたのは妹。父がいて、まだそれなりに裕福だったころ、家に出入りしていた『阿媽（あま）』と呼ばれるお手伝いさんに連絡し、相談すると『女の方が高く売れる』と。母は妹を溺愛していて、散々迷ったけれど、帰国後の働き手の事も考慮し、僕を連れ帰る決断をした。遼寧（りょうねい）の、妹の売られた先で、最後の言葉を交わした。本能的に別離を悟った妹は、半狂乱だった。

だが、しがみつこうとする妹を、僕は日頃から嫉妬していた所為もあり、投げ飛ばして、その場を後にした、と思い込んでいて、以後、そのことが頭に焼き付いて離れなくなった。

妹と別れて間もなく、母子二人、大連から博多へ帰国した。

丁度、終戦記念日の一年前のことだった。

幼い頃はそうでもなかったのだが、長ずるにつれ、あの時の妹の姿が、鮮明に脳裏に浮かぶようになり、自分の心の奥底に居座って動かない。自分の人生で犯した最大の罪であり、禍根(かこん)であると》

「そのことが、お母さまの書付で取り払われた……?」

「というより、少しだけ気が軽くなった、というだけだけど。実は、あのとき、妹を振り払ったのは、母だったということが、書付で分かった。母も、断腸の思いだったけど、ここで鬼にならなければ、母子三人生き延びられない。そう決断して、僕にしがみつこうとした妹を、母が払いのけ、二人で、近くの駅まで走り続けたと」

「書付に、そう書かれていたのですね?」

「そう。だけど、その事を、僕は一度も聞いていない。母にとって、子を売るなんて、人生最大の痛恨事。話したくても話せなかったのかもしれないし、一時僕を売ろうと考えた事への、蟠(わだかま)りみたいなものもあったのかもしれない。当初、この事を母は墓場まで持っていく積りだったんだと思う。ただ、頭の片隅に、自分の人生の記録として残して置くべきと。そして、自分が死んだ後、僕に、少しでも、その時の苦悩を知って欲しい、と思い直したのかも知れない」

「親子と言うものは厄介なものでございますね」

自分も、父との間にいくつもの確執を抱えていた。親子とは、哀しいけれども、所詮そういう関係性なのだろう。

「つくづくそう思う。実はね、母の書付にはもう一つ。とても大事なことが書いてあった。むしろ、僕にとってはこっちの方がね……」

「お差支えなければ、お教えください」

「その妹と、実は、母は、戦後三十年近く経って、会っていた……」

「まあ!そうでしたの……」

「僕も、中国残留孤児の問題があった折、日本名で探して貰ったんだけど、見つからなかった。けど、母は『阿媽』だった人を通じて、国交正常化後直ぐにね。但し、養父母の知人として、だけど」

「妹さん、ご無事でしたのね」

「うん。既に結婚していて、子持ちだったらしい。初顔合わせの時、思わず抱きしめそうになったけど、妹の訝(いぶか)し気(げ)な表情に戸惑い、覚えていた中国語で、『お会いできて嬉しい』とだけ言った、と」

「書付にそう書かれていた……」

「そう。でも、僕にはその事も話してくれなかった。今更ながら、母との間の溝の深さを思った。でも……、結婚にしても、僕には僕の意思も考えもあるわけで……。難しい問題だよね。ま、

そういう尋常ならざる親子関係も含めて、僕の人生ではあるけれど……」
「尋常で、何の問題もない親子関係って、あるのでしょうか？」
「さあ、どうかな。他の人生、経験した事ないから分からんけど」
「問題があるからこその親子じゃないですか。そう思いません？」
「その通りだと思う……。で……、思い立ったのが、妹の無事を祈るための断食さ。最初は家でやってたけど、妻の手前もあるしね。ここを知ってからは、妹との思い出に浸りながら……」
「でも、妹さんは息災でいらした。という事は、もう断食する必要がなくなった……」
「さあ……、それはどうかなあ。少し違うようにも思うんだよ。
僕にとっては、妹の無事を願うのと同じくらい、いつしか、断食すること自体が、生活のリズムと言うか、アクセントと言えばいいのか、生きる力にもなっていたんじゃないかって……」
「蜂須賀様の生き方になられた……」
「そうねえ。生き方と言えば、そうなるか、ねえ」
「長く見えて、短い人生なのに、いろいろあり過ぎますよね」
「ホントそう思う。今頃になって、遺書めいた母の書付が出てくるなんて、何という巡り合わせの悪さか、と思わないでもないけど、全て自分の、これまでの行いが招いた結果なのだろうからね」
ため息とともに、健一郎はそう言って上を向いた。

「私も、似たような人生ですから、偉そうな事言えませんけど、人生って、そんなすれ違いの連続なんじゃないでしょうか……」
「すれ違いの連続か。そうかもしれん。いや、すれ違いと言えば、妹の事だけど、この歳になって、初めて会えるかもしれないんだ」
母の遺した連絡先に、（中国語に翻訳した）手紙を出し、息災を確認し、会うことが可能かどうか、調整中だと。
「それはよろしゅうございました。上手く運ぶといいですね」
「うん。養父母の知人の息子として、母の死を伝えねば、とね。晩年に至った今、僕に出来ることは、それくらいしかない」
「ご好運をお祈りします。ところで、来年からは如何なさいます？」
真理子は、いま一番気がかりなことを、ズバリと聞いた。
「一年に一度、この宿からの風景を見ることで、自分の中の何かが、リセットされていくような気がするんだよ。だから、もう来なくともいい筈なのに、今年も来てしまった。人は皆それぞれに、自分の人生をリセットできる場所を、求めているんじゃないのかな」
「では、来年も……？」
「女将さんが迷惑でなければ、これからも……」
「迷惑などとは露ほども……。お待ち申し上げております」
「もう、歳から言って、あと何度来られるか分からんけど、姉ケ崎から、歩けるうちはてくてくと……、暑いときにはタクシーでね……」

「あら！うちは五井の方が、遥かに近いんですけど……」
「えっ。そうだったの。知らなかった。十五年も馬鹿みたいだよね。自分が最初に降りた駅に、変に拘(こだわ)ってた……」
「いいえ。多分、姉ケ崎の方からお出でになられた方が、風景が大連の感じに近いと……。そういうことだったんじゃないでしょうか」
「そうだね。そう思えばいいかな。
今夜は、『日向荘』自慢の、新鮮な江戸前の魚介を頂こうかな」
「勿論、板長も腕を撫しておりますので……」
二人は、顔を見合わせて笑った。健一郎が、こんな晴れやかな表情を見せたのは初めてのこと。真理子は、この笑顔を見るためだけに、毎年待ち続けていたのではないかと、ふと思った。
《今年は、あの敗戦から八十年目の夏を迎える》